中世クラクフの国際商業
── その特色と意義 ──

International Trade of Cracow in the Middle Ages
── Its historical feature and importance in European Trade ──

藤　井　和　夫

Cracow, old capital of Poland, represents political, scientific and cultural center of the country. The oldest documentary sources date from the mid-tenth century, describe the city as an important commercial center at the junction of several great international trade routes leading the West to the East, and the North to the South of Europe.

The geographical advantages contributed to a rapid grouth of Cracow in the Early Middle Ages. Cracow was Poland's leading city not only politically but economically in that time.

In the Late Middle Ages, Cracow's importance diminished, owing to the changes of European main routes of trade and the political situation of Poland and Central Europe, although Cracow increased the role in the trade with the Habsburg Monarcy.

Kazuo Fujii

JEL：N74
キーワード：ポーランド、クラクフ、中世国際商業
Keywords：Poland, Cracow, International Trade in the Middle Ages

はじめにーポーランド社会の中のクラクフ

ポーランドのクラクフは、日本人にもよく知られた美しい観光都市である。幸い第２次大戦の戦災を免れた市内には、旧王宮の壮大なヴァヴェル城や、その種の中世都市の広場としてはヨーロッパ最大といわれる中央広場に面した聖

マリア教会をはじめとする数多くの教会と修道院、そして豪壮華麗な旧市街周辺の建物群に恵まれている。どの季節にこの町を訪れても、世界中から集まる観光客でにぎわっていて、その活気は、最近ウッジ市を抜いてポーランドで第 2 位に復活したといわれる人口増加にも表れている。

現代のクラクフのこの人気と賑わいは、この町がもつ過去からの遺産に負うところが大きい。もちろん、クラクフに関する前稿で指摘したとおり、すでに 19 世紀のポーランド人にとってクラクフが、「文化の首都」、「ポーランド国内にあって最も良きもの」、「移民の放浪の旅の果てに帰国して小さな土地を持って落ち着くとすれば自由都市クラクフ」と語られ、憧れの町として賞賛を惜しまれなかったのは、単に過去からの蓄積によるのではなく、分割支配という状況下で近代の夜明けを迎えたポーランドにおいてこの町が相対的に政治的な自由を持つとともに、新しい社会層の形成という点で時代をリードする面があったためであろう[1)]。それでも、19 世紀にその同時代の新しい社会的なダイナミズムをもっていたことを含めて、政治と文化の歴史と伝統をこの町の最大の魅力と考える人が多いのは古今を問わない。

ヴァヴェル城が象徴する政治的伝統という点では、ポーランドの歴史的な国家形成期からすでにクラクフは重要な政治の中心地であり、最初はいわゆる小ポーランド地方といわれる地域の政治の中心地に、そして 11 世紀にはカジミェシュ 1 世復興王がグニェズノから都を移し、ピアスト朝の王座都市として成立した国家全体の政治の中心地となっていた。12 世紀半ばに再びポーランドが複数の公国に分裂した際には、その再統一事業はクラクフに居を定めた領主（公）によって推し進められ、1320 年にクラクフで戴冠式の行われたヴワディスワフ・ウォキェテクが王位に就いたことでポーランド国家の再統一は完了する。以後クラクフはピアスト朝とヤギェウォ朝の正式の首都となり、それは 17 世紀初頭のズィグムント 3 世の時代まで続いた。歴代の王の戴冠式は、さらに 1734 年のアウグスト 3 世まで、引き続きクラクフで催された。ヴワディスワフ・ウォキェテクはまた最初に死後ヴァヴェル城の聖堂に葬られた

1) 藤井和夫［2012］、217 頁。

王でもあり、彼の時代以降、ヴァヴェル城と付随する大聖堂は、中世から近世に至るまでポーランドの公式の政治権力の象徴であり続けたのである[2)]。

一方文化的な伝統としては、まず学問の象徴として 1364 年にカジミェシュ大王によって設立を命じられ、のちにヤギェウォ王によって確固たる学問の府に育てられたポーランド最古のヤギェウォ大学の存在があげられる。コペルニクスをはじめ、幾多の偉大な知識人を育てた同大学は、数学や天文学を中心とした学問の府として、そして学術書の出版の中心地としてのクラクフの地位を高めた。またヴァヴェルの丘には最初の聖堂付属学校が 1110 年に開設され、最初の普通（非宗教）中等学校も 1588 年にクラクフに作られたのであった[3)]。さらに芸術面では、クラクフの教会に典型的にみられるようなローマ・カトリックのキリスト教がポーランド芸術の開花と発展の主たる母体となり、またルネサンスやロマン主義、バロックといった西ヨーロッパ芸術の影響を強く受けながらも、一方で東西ヨーロッパ文化を融合するというその特徴も、このクラクフの地理的、政治的な位置が大きくかかわることになった[4)]。そしてポーランドの近代文化が誕生するとき、啓蒙主義の時代を経て、クラクフでジャーナリストや教育者、エンジニア等の新しい知識層が生まれていたことは前稿で示した通りである[5)]。

このように、今日のクラクフの土台には、連綿と続く政治と文化の伝統と歴史がしっかりと組み込まれている。しかし、忘れてはならないもう一つの重要な要素がこの町の歴史には存在する。それは経済活動、とりわけてクラクフを支えた国際商業である。本稿の目的は、その特色と意義を地域的な結びつきやルートとその時代的変遷を中心に概観することである。

1. 揺籃期のクラクフと国際商業

2 世紀に活躍した古代の天文学者で地理学者のクラウディオス・プトレマイ

2) 以上はおもに Małecki J.M.[1975] s.173、Małecki J.M.[2008] s.46-52 および Carter F.W.[1994] p.1 による。
3) Carter F.W.[1994] p.4,6-7.
4) たとえば Dobrowolski T.[1971] s.12-14, 519-522、および Carter F.W.[1994] p.4,7-8。
5) 藤井和夫［2012］213-216 頁。

オスの書の中にある Karrodunon という場所がまさにクラクフであるという今日では怪しいとされる説や、Wincenty Kadłubek や Jan Długosz の年代記に出てくるような伝説、あるいは 9 世紀末の聖 Metody の伝記にある Wiślan の国の首都であったといったたぐいの話を別にすれば[6)]、時期や内容の確かな記録の中に初めてクラクフの名前が出てくるのは、10 世紀に、当時スペインのトゥルトーザ（トルトーサ）の住人でコルドバのカリフに使えていたユダヤ人商人、旅行家のアブラハム・ベン・ヤクブ、アラブ読みでイブラハム・イブン・ヤクブが残した 965〜966 年に行った中央ヨーロッパ旅行の報告である。その中に Karako(もしくはアラビア語の文字は Karaku、Karakou とも読める）という言葉があり、言語学者や歴史家によってそれがクラクフと確認されている[7)]。

その記録の中にはスラブ人による 4 つの国についての言及があり、そのひとつボヘミアや当時のクラクフ地方を治めるボレスワフ王に関して、次のような記述がある。「ボレスワフ王のプラハとクラクフ間の行程は 3 週間で、ハンガリーと接している。石と石灰でできたプラハが最も商品が多く、クラクフからルス人やスラブ人が商品をもってやってくる。そして彼らのところ（クラクフ）にイスラム教のハンガリーから商品と支払い用金属のためのはかりをもったユダヤ人やハンガリー人がやってきて、奴隷、錫そしてあらゆる種類の毛皮を売った。」ここから、当時チェコ公ボレスワフ 1 世の支配下にあったクラクフは、国の政治・行政の中心地としてだけでなく、生産や商業での経済の重要な中心地、ロシアやハンガリー方面とプラハを結ぶ大通商路の重要な中継都市としても紹介されていて、クラクフから西に向けて、毛皮、金属、奴隷が輸出されたことがわかる[8)]。つまり、事実上は 11 世紀、正式には 14 世紀から国の政治の中心地となったクラクフは、じつは 10 世紀のその最初の確認しうる記録の中で、すでに国際商業の中心地、特に中継ぎ商業の中心地として記録されていたのである。

6) Małecki J.M.[2008] s.9-17 および Dobrowolski T.[1971] s.12-14.
7) Małecki J.M.[2008] s.21.
8) Małecki J.M.[2008] s.21 による。

さらに考古学的な証拠も、早くからクラクフが大規模な商業の拠点であったことを示している。Małecki によれば、ピアスト朝以前のクラクフの町はヴァヴェルの丘の外にも広がっていて、そのふもとの今日の聖マリア・マグダレナ広場に、のちにオコウ Okoł と呼ばれた柵に囲まれた町が存在したと確認されているが、その地域の Kanonicza 通りの地下から、最近「鉄の貯蔵品 skarb żelazny」つまり 4212 本の鉄の延べ棒が詰まった大きな木の箱が見つかり、最新技術によって 9 世紀のヴィシラン人 Wiślanie の時代のものであることがわかった。モラヴィアやスロヴァキアの例から類推するに、それらは支払い手段として用いられ、延べ棒の一方に穴が開いていてひもを通して束ね、高額の支払い単位としたものらしい。オコウでの 4 トン近くもあるこの大きな貯蔵品の発見は、この貯蔵品の所有者がだれであれ、この地が手工業=商業地域であった証拠で、ヴァヴェルの城塞、その付随都市、ヴィスワ川両岸のいくつかの小さな居住地区からなるクラクフは、およそ 9 世紀半ばにはすでに、防衛のための町あるいは領主所在地としての政治の町としてばかりでなく、というよりはおそらくそれに先んじて、市場と生産拠点として経済の町という機能を持っていたのであった[9)]。

2. 商業史の中の国際商業

ある特定の都市や地域に注目してその商業の歴史を考察する際に、商業（交易）の持つ多様性や多層性、具体的には地理的な条件に基づく商業のカテゴリーに注意を払う必要がある。すなわち、世界商業 handel światowy を含む国際商業 handel międzynarodowy、一国を市場とする国内商業 handel krajowy、地方の中心都市を核とする都市間取引ネットワークの形をとる地方商業 handel regionalny、都市の住民や後背地および周辺農村との日常的な取引を主な内容とする地域内商業 handel lokalny である[10)]。もちろんそれらは密接に関連しあっており、地域内商業を伴わない地方商業や、地方商業と結びつかない国際商業を考えることなどできないが、各都市の商業にはそれぞれこのカテゴリー

9) Małecki J.M.[2008] s.22.
10) Miodunka P.[2016] s.37.

の上での特徴を見て取ることができる。クラクフという町は、以下にみるように全ヨーロッパ的な国際商業の中心地のひとつという顔と、クラクフを中心に広がる地方商業ネットワークの結節点という顔の両方を持ち、しかもその相貌の特徴は時代とともに大きく変化したのであった。その意味で、ポーランドの中では特徴的な、そしてある意味ではポーランド経済の特徴を最もよく表す象徴的な商業都市ということができよう。

国際商業を担う都市というのは、概して大規模な、一定の政治的、地理的条件を満たす都市であって、ひとつの国にいくつもあるわけではない。ヨーロッパでも数えるほどの数の都市がそれにあたるが、ポーランドの場合その第一の都市がクラクフであった。一方、地方商業においては、多様な結びつきが一点で結合して地域的ネットワークとしての地方市場が形成されるのが一般であるが、ポーランドの地方市場は、様々な都市特権を明確に定めたドイツ都市法の普及とともに発展し、クラクフを含む小ポーランドではこの動きは基本的に 14 世紀になってやっと始まったのであった[11)]。実はクラクフの商業は、時代が下るほど、そしてポーランドの歴史の特殊事情から近代になると決定的に、地方商業としての意義が大きくなる。しかし、その問題は別稿で論じることにして、本稿ではクラクフのもう一つの顔である国際商業のルートや範囲の特色を概観することに課題を限定したい。

3. 国際商業都市クラクフとその通商路

1340 年に 12,000 人の人口を擁し、965 年のミエシュコ 1 世によるキリスト教受容を受けてその子ボレスワフ勇敢王がそこに司教座を設け、やがて宮廷と大聖堂を持つことになったクラクフは、1335 年にカジミェシュ大王によって作られたユダヤ人居住のカジミェシュ地区とそのシナゴーグも含めて、人口規模や宗教的、政治的都市機能から見てヨーロッパの 14 世紀における大規模中心都市のひとつということができる[12)]。政治都市としては 17 世紀初めのワルシャワへの首都移転によってその地位を次第に失ったとはいえ、近世に至るま

11) Miodunka P. [2016] s.37.
12) Carter F.W.[1994] p.5-6.

でポーランドの統治の中心地であるとともに諸外国からあまたの高官や使節を迎え入れる情報と文化の窓口として重要な役割を果たしていた。それを支えたのは、その誕生以来この町に繁栄をもたらした国際商業であった。

クラクフは中継ぎ貿易都市で、ヨーロッパ大陸の東西ではロシアやキエフとシロンスクやプラハを経てドイツ諸都市を、そして南北ではウィーン、ハンガリーとバルト海沿岸を結ぶルートの十字路にあり、そこを経由する商品は西欧と東欧を、そしてさらに近東、中東方面とも行き来した。しかも海に面していないにもかかわらず、バルト海、北海とつながるハンザ同盟のメンバーでさえあった[13)]。クラクフ商人の活発な行動によって、そのコンタクトは東はロシアに、西はイギリス、フランドル（ベルギー）、イタリア北部に、北はグダンスクへ、南は黒海沿岸のヴェネツィアやジェノヴァの植民地に達していた。西からは特に毛織物、北からはにしん、ハンガリーからは銅、黒海沿岸からは香辛料、ロシアからは毛皮がもたらされた[14)]。

クラクフはポーランドでは南端に近い辺境の町になるが、ヨーロッパにあってはどの都市、地域にも比較的に近い内陸交易に有利な位置にある。中世にクラクフと通商関係の深いヨーロッパの諸都市や地方を地図の上で見ると、近い順に、コシツェ（スロヴァキア）、ヴロツワフ、ウィーン、プラハ、グダンスク、ニュルンベルク、ヴェネツィア、モルダヴィア（黒海北岸）、ブリュージュ（低地地方）等となる。クラクフはそれらの都市や地域と通商を行い、さらに仲介者としてそれらの都市と別の地域との交易を中継していたのであった。

クラクフと諸都市を結ぶ通商路をもう少し詳しく見ると、まず南北の通商路としてハンガリーにつながるスロヴァキアのコシツェ Koszyce からレヴォチャ Lewocza を経てポーランドのノヴィ・ソンチ Nowy Sącz に入り、そこからチェフフ Czechów、リプニツァ・ムロヴァナ Lipnica Murowana、ボフニア Bochnia、ヴェリチカ（ヴィェリチュカ）Wieliczka を経てクラクフに達するルートがある。さらにクラクフから道は北に向かってミェフフ Miechów、クジェルフ Kurzelów、ピォトルクフ Piotrków、ウェンチツァ Łęczyca、ブジェ

13) Carter F.W[1994] p.6, Małecki J.[1975] s.174.
14) Miodunka P.[2016] s.39.

シチ・クヤフスキ Brześć Kujawski そしてトルニに延び、ヴィスワ川の水路を経てグダンスクに至り、ポーランドを海路で西ヨーロッパ、とくに毛織物商業の中心地フランドルと結びつけた。フランドルとは、すでに 14 世紀にはアビニョンの教皇との貨幣のやり取り（教皇献金）をその仲介で行なうほど強い関係を持っていて、そのルートを維持・強化するために 1390 年から通商路の北部はより西寄りに直線的なシェラズ Sieradz、カリシ Kalisz、ポズナン Poznań および西ポモージェ経由の「新フランドル街道」に変わった[15)]。

東西のルートに関しては、クラクフが通商で最も強い結びつきを持っていたのはヴロツワフで、プラハを経てニュルンベルクや北イタリア都市に至る通商路よりも、その北側でスワフクフ Sławków、ベンジン Będzin 等を通ってクラクフとシロンスク、その中心都市ヴロツワフとつながるいわゆる「塩の道」がより重要であった。クラクフはシロンスクに主に塩を輸出し、毛織物とシフィドニツァのビールを輸入した。ヴロツワフからクラクフを経由して通商路はさらに東のルヴフ方面に伸び、そこからひとつはキエフを経てロシアへ、もうひとつはタタールの道を通ってクリミア半島のジェノヴァの植民地カファ Kaffa に達していた[16)]。

クラクフとヴロツワフとは特別密接な関係を長く保持しており、その影響でクラクフの街づくりは公共施設や都市計画においてヴロツワフと非常に類似しているし、両都市は建築や彫刻、絵画の分野で相互に強い影響を及ぼしあっていた。クラクフの中央広場に主にヴロツワフを中心とするシロンスクとの主要貿易品である毛織物取引にかかわる織物会館 sukiennica を持ったのも、シロンスク人が一般に町の統治に依拠するいわゆるマグデブルク法をクラクフが都市法として受け入れたのも、両市の深いつながりゆえであった。クラクフにはヨーロッパ各地や中東から多くの外国人がやってきて住んでいたが、とくに多数のシロンスク人（ポーランド人とドイツ人）が商業だけでなく学問のためにも来住しており、15 世紀初めにはクラクフの大学等で学ぶ貧しいシロンスク

15) Dobrowolski, T.[1971] s.11, Kutrzeba,S.[1903] s.11.
16) Dobrowolski, T.[1971] s.11.

学生のための寄宿舎さえ現れた[17)]。

一方、モルダヴィアの黒海北岸（および西岸）は、15 世紀にトルコが勢力を伸ばしてくるまでヴェネツィアやジェノヴァの植民都市が点在していて、クラクフは北イタリア商人との取引を通じて、地中海、黒海ルートでの中東やアジアの物産、特に香辛料のヨーロッパへの流入口の一つになっており、逆にヨーロッパ物産のアジアへの流通の仲介者の役割を果たしていた。

商業のための通商路が存在するかどうか、またどこを通るかという問題は、中世にあっては今日想像もできないほど重要であった。通商路の存在は基本的に自然的な条件で決まってくるが、それを人為的に変更することは困難で、その変更は都市や地域の繁栄と没落をもたらしたから、都市も領主も通商路に対しては大きな関心を寄せていた。通路強制やステープル権が都市にとって最大の経済特権であるのはそのためである。クラクフの場合、このステープル権によってルヴフと競争しながら黒海沿岸から運び込まれる香辛料や絹織物といった東洋物産で大きな利益を上げていたが、一方でシロンスクから輸入される毛織物に関してはステープル権を行使することはできなかった[18)]。通商路に変更を加えようとした例として、たとえばクラクフにとってコシツェからトルニに至るハンガリーとポーランド北部のプロイセン領を結ぶ「プロイセン街道」には、クラクフの都市特権の及ばない東部のサンドミェシュを経由する南北の別道があり、クラクフは何とかその通行を禁止しようとしていたが果たせなかった。通商路に恵まれるということは、都市の意図や政策の及ばないものだったのである[19)]。

これまで述べてきたように、恐らく都市の誕生以来クラクフは通商路に恵まれた町であった。それゆえに政治の動きを超えたクラクフの町の繁栄があったわけであるが、時代の流れはクラクフと他の都市や地域とのつながりを大きく変えて、その通商路にも大きな変化をもたらし始め、それはやがてクラクフの町自体の衰退につながっていくのである。

---

17) Dobrowolski, T.[1971] s.12.
18) Małecki J.M.[1975] s.174.
19) Kutrzeba,S.[1903] s.8-12.

4. 15, 16 世紀のクラクフ国際商業

地の利を生かしてポーランドにおける国際商業の中心的役割を果たしていたクラクフが最初に躓くのは、ポーランドで荘園経済が発展し、西ヨーロッパへの穀物輸出がその重要性を増し始めた 15 世紀半ばであった。穀物輸送のためにヴィスワ川を使う交易が中心となり、小ポーランドやリトアニアと結ばれたルブリンとワルシャワや大ポーランド地方のポズナニが重要な役割を果たすようになり、さらに西ヨーロッパへの穀物輸出港としてグダンスクが突出した地位を獲得して、この分野でのクラクフの役割は小さなものとなった[20)]。15 世紀の末までにクラクフはポーランドの中心的商業中心地としての地位を失い、ポーランド全体の輸出入はもちろん、国内の農業生産物の物流や、ぜいたく品から生活必需品までその小売りも卸売りも何もかもクラクフが支配するという状態ではなくなった。代わってその役割を担える都市があるとしたら 18 世紀末までのグダンスクのみであった[21)]。

同じく 15 世紀から 16 世紀にかけてトルコがバルカン半島の支配を広げるにつれて黒海の港町との通商ルートが圧迫を受け、加えてバルカン商人との競争も激しくなったために、クラクフのこのルートでの胡椒や絹織物という高価な商品の取引は失われていった[22)]。おまけにこれには地理上の発見というヨーロッパ商業史上の一大事件が重なった。今や東方貿易の主役であった香辛料は大西洋ルートでヨーロッパに持ち込まれることになり、今までとは逆の方向、グダンスクやヴロツワフ経由でクラクフに運ばれることになった[23)]。クラクフが東方物産の取引をステープル権の行使によって独占し、莫大な利益を上げていた時代は終わりを告げたのである。

一方でクラクフが国際商業の中で一定の地位を確保し続けた分野もある。16 世紀から 17 世紀にかけてポーランドがその領土を東部および北部に拡大するにつれて、首都のワルシャワ移転に先立って政治の中心は北へ移りつつあった

20) Małecki J.M.[1975] s.176.
21) Carter F.W.[1994] p.337-338.
22) Carter F.W.[1994] p.337.
23) Małecki J.M.[1975] s.176.

が、交易の面では辺境ゆえの優位もあって、クラクフは、シロンスク、ボヘミア、北部ハンガリーやトランシルヴァニアとの比較的に近い外国都市とのつながりを維持し、16 世紀と 17 世紀初期にはその関係を強めさえした。この国際商業では、クラクフの仲立ちで鉱物のような原料品やワインのような加工品と、より高価な西ヨーロッパの繊維製品、割安の国内繊維製品、金属手工品とが取引された[24)]。また近隣のドイツの諸都市からは手工業品が、イタリアからは南欧の果物と香辛料が、ハンガリーからワインが、トルコからはアルメニア商人の仲介で東方物産が輸入された[25)]。

中でもクラクフ商業にとって重要なのは、16 世紀前半にヴロツワフとの間で少し商業上の争いが見られたにしても、相変わらずシロンスクとの交易であり、そこはクラクフ近郊で産出する塩および小ポーランドやモルドヴァから運ばれてくる肉牛の最大の市場であったし、クラクフ商人はそのほかに馬、毛皮、蝋、羊毛をシロンスクで販売し、手工業品やシロンスク産もしくは西ヨーロッパ産の毛織物、亜麻布、ビール、金属製品および小間物を輸入した。15 世紀のフス戦争後はプラハとの交易も特にユダヤ人商人の手によって活発化した。またシロンスク、チェコ経由でクラクフ商人はドイツ諸都市、とくにニュルンベルク、ライプツィヒ、ハレ、ハンブルク等にも進出し、牛、毛皮と小間物の取引を行った[26)]。

増大するトルコの脅威も、まだその支配下にない北部のハンガリーとの商業的つながりを絶つことはできなかったからクラクフとハンガリーとの交易は相変わらず活発であり、16 世紀の後半にはさらに増加も見られたが、従来の交易の中で重要であった鉱産物、特に銅の輸入に関しては、アウグスブルクの商人などがやって来て直接チェコやシロンスクを経由してドイツに輸入しはじめ、クラクフとの取引は減少した。代わりにクラクフにはワインが輸入され、クラクフから毛織物やニシン、香辛料が輸出された[27)]。ハンガリーに関しては 16

24) Carter F.W.[1994] p.338.
25) Małecki J.M.[1975] s.177-178.
26) Małecki J.M.[1975] s.178-179.
27) Małecki J.M.[1975] s.179-180, Carter F.W.[1994] p.338.

世紀に特徴的な現象として、トルコの勢力が増すにつれてハンガリーの南部はトルコの勢力圏内となり、その地域とトルコの勢力圏に入らなかったハプスブルク帝国のオーストリアや北部ハンガリーつまりスロヴァキア地方との交易が困難になったということがある。このことは実はクラクフの国際商業にとってマイナス要因とはならなかった。というのも、かえって両地域の交易をクラクフが仲介する役割が高まったからであり、トルコを通してもたらされる東方物産は今やドナウ川地域ではなく、モラヴィアを通ってルヴフ、クラクフ経由でハプスブルク帝国に運ばれるようになった。逆にモラヴィアの毛織物のハプスブルク領北部ハンガリーやトルコ領への販売もクラクフ商人が担うことになった。スロヴァキア地方のレヴォチャ Lewocza の町は、クラクフ商人にとってシロンスクとモラヴィアから買い入れた大量の毛織物やイタリアからクラクフ経由でもたらされる絹織物がスロヴァキアに再輸出される重要な窓口となった。トランシルヴァニア（ルーマニア）とクラクフのつながりも同じような状況にあり、同地方にトルコ支配が進んだのちは、西ヨーロッパの物産はクラクフ経由で持ち込まれた。トランシルヴァニアの商人もクラクフにやってきて、ワインやはちみつを販売し、毛織物や亜麻布、金属製品、小間物等を持ち帰った。クラクフは他方でトルコの織物（czmlet、muchajer）やギリシャのワインをハプスブルク領内にもたらす役割も担った。1550 年に皇帝の禁止令が出た後トルコ領のハンガリーへの販売ができなくなったオーストリア産の大鎌や金属製品が、クラクフ経由の回り道で輸出されるというようなこともあった[28)]。

いずれにしても、トルコのバルカン半島進出やアジアの香辛料貿易が大西洋ルートに移ったことを受けて、16 世紀以降クラクフの国際商業は、その交易範囲を縮小しつつヨーロッパ中東欧からのより安価な原材料取引が中心となったということができる。今や西ヨーロッパからの主要な中継ぎ貿易品となった毛織物に関しても、ギリシャ商人、ブルガリア商人、アルメニア商人その他のバルカン商人との競争のために、クラクフの毛織物の通商はハンガリー北部つまりスロヴァキアやトランシルヴァニア、東シロンスク、モラヴィア、リトア

28) Małecki J.M.[1975] s.180,185-186.

ニア、モスクワ地方の市場に限定されることになった[29]。しかしそうした困難な状況にもかかわらず空間的には 16 世紀のクラクフの国際的な関係はそれ以前の時期よりむしろ広がり、イタリアではナポリまで、北東ではモスクワまで達したのであり、縮小したのは取り扱う商品の種類で 16 世紀半ばからハンガリーの銅が、ついで毛皮が次第にクラクフの国際商業の中でのその意味を失っていったのだという見方もある[30]。資料不足のために正確さには欠けることを認めながら Małecki は、16 世紀末のクラクフの国際貿易額の貿易対象地域別の構成を、シロンスク 35%、オーストリア 29%、ドイツ 12%、ハンガリー・トランシルヴァニア 5%、モラヴィア 3%、チェコ 3%、その他 13%と見積もっている[31]。

5. 17, 18 世紀のクラクフ国際商業

17 世紀に入ると、国際情勢はクラクフ国際商業にとっていっそう不利なものになっていった。スウェーデンの侵入（1600〜1629 年、「大洪水」1655〜1660 年）、数次にわたるトルコとポーランドの衝突、同じく繰り返されるポーランドとロシアの戦争、世紀半ばに始まるコサックの反乱、こうしたポーランド領内のできごとのいずれもがクラクフの商業を脅かせたばかりでなく、ポーランド経済全体を危機に陥れた。さらにクラクフの国際商業に大きな打撃を与えたのは、ドイツやチェコ諸地方を主な舞台とした 30 年戦争（1618〜1648 年）であった。

たとえばクラクフとプラハとの交易は、チェコとポーランド、特に大ポーランド地方との交易に力を入れ出していたヴロツワフとの競争によってすでに停滞し始めていたが、30 年戦争が始まるとさらに後退した。クラクフと東部チェコのモラヴィア地方との交易については、17 世紀の前半はまだ活発に行われていて多くの毛織物や亜麻布がクラクフに輸出されていたが、クラクフからモラヴィアへの肉牛や毛皮の輸出はかなり減少が見られ、クラクフを経由し

29) Carter F.W.[1994] p.337.
30) Miodunka P.[2016] s.39.
31) Małecki J.M.[1975] s.180,185-186.

て行われるそれらの地域とモルドヴァあるいはトランシルヴァニアとの交易も、17 世紀後半にはほとんど見られなくなった。「大洪水」が終わった直後の 1660 年のクラクフの通関にはチェコおよびトランシルヴァニアへの荷の通過が全く記録されていない。ただモラヴィアからの毛織物とハンガリーからのワインの輸入はある程度見られる。クラクフとオーストリアとの交易では、オーストリアから金属製品やワイン、イタリアの絹織物が輸出され、一方でクラクフからの輸出品は何もなかった[32)]。

あれほど重要であったシロンスクとの交易についても、17 世紀には大きな変化が見られた。次の表は通関の記録に残された荷駄を運ぶ馬の頭数を表しているが、対シロンスク交易の衰退を非常にはっきりと示している。17 世紀の初頭にはクラクフ・シロンスク間の交易はなお活況を呈していたが、30 年戦争が始まると途端に停滞し始め、スウェーデン軍が国中を支配し荒らし回った「大洪水」の時期以降はほぼ完全に消滅してしまう。シロンスクからもたらされる毛織物は、クラクフの北部ハンガリーやルヴフあるいはモラヴィア地方との交易の主要商品であったから、このことはそれらの地方との交易も停滞してしまうことを示している。実際にかつてモルドヴァからルヴフ経由でクラクフに送られていたギリシャのワインが、17 世紀の初めごろから海路を経てグダンスク経由で入ってきていた[33)]。

他方で 16 世紀から 17 世紀にかけて、クラクフとイタリアとのつながりが深まった様子が見られ、またスペイン、フランス、イギリスおよび低地地方からクラクフに流れ込む商品の種類が増えて、たとえば高級繊維品、上等のワイン、西ヨーロッパのより洗練された手工品などに対して、ポーランド東部、リトアニア、ロシアからの需要は旺盛であったし、逆にドイツ市場向けと、量では劣るがバルト海沿岸向けの毛皮、蝋、蜂蜜や家畜のような原材料のクラクフ経由の輸出は続いていた。また、クラクフ市内と周辺の小ポーランド地方向けに食品（穀物、魚）、飲み物、建築材料が輸入されていた[34)]。

32) Małecki J.M.[1975] s.181-182.
33) Małecki J.M.[1975] s.182-183.
34) Carter F.W.[1994] p.338.

18 世紀のクラクフ・シロンスク交易　（荷駄馬の頭数）

年	シロンスクからクラクフ	クラクフからシロンスク
1600	2500	3000
1609	4000	3050
1619	3000	3100
1629	1900	3100
1639	1150	1600
1644	1800	2950
1654	1050	1350
1664	650	30
1674	550	70
1684	300	20

出所：Małecki J., Rola Krakowa w handlu Europy Środkowej w XVI i XVII wieku, “Zeszyty Naukowe Akademii Ekonomicznej w Krakowie” nr70, 1975, s.183.

おわりに

中世におけるクラクフは、国際商業においては、ヨーロッパにおける東西南北の内陸交易路の結節点にあって一大商業中心地として繁栄した。その政治的中心地としての地位を失い、またヨーロッパの東方貿易のルートが大西洋経路に移った 16 世紀には、西のヴロツワフやチェコと東のルヴフやモルドヴァアドとの東西貿易、つまりシロンスク、チェコ、モラヴィアとハンガリー、トランシルヴァニア、ルヴフとの仲介貿易を継続させ、さらにトルコの進出を受けた南部ハンガリー、トランシルヴァニアと進出を免れたハプスブルク領とを迂回する形でつなぐ中継ぎ貿易を担ったのであった。しかし 17 世紀には、大きく変化する国際関係の中で、クラクフの国際商業上の地位は失われ、取引量が減少するとともに輸出入のバランスも崩れた[35)]。

総じて、18 世紀のクラクフは、毛織物、蝋、家畜の国際取引の役割を担いながら、地方的な商品取引での役割を拡大させることによってゆっくりヨーロッパの商業環境の変化に適応していったとみることができる。遠距離で広い範囲

35) Małecki J.M.[1975] s.185-186.

の国際商業よりも、より一層地域的、国内的仲介者の役割に特化していったのである。地方レベルでのクラクフの商業的影響力は、西はシロンスクとの国境から東はルヴフまで、北はヴィスワ川中流、南はカルパチア山脈の国境まで、という範囲であった[36)]。それゆえに、確かに 18 世紀の末、1772 年に始まるポーランドの分割は、クラクフの国際商業の結節点としての意味を失わせることになったが、それ以上に国土分割と国家滅亡はクラクフ商業史の上からは、当時クラクフにとって最も重要なものになりつつあった地方市場を新しい国境が分断してしまって、クラクフを中心としたネットワークが機能しなくなったことに最も大きな損失を見るべきであろう。それらの問題については、また別稿で分析してみたい。

最後に、中世のクラクフ国際商業の貿易品構造は、ポーランド経済全体と同じ性質、すなわち西に対しては原材料を輸出して製品を輸入し、そして東に対しては毛織物や手工業製品を輸出して原材料を輸入するものであった[37)]。Carter は中世のクラクフについて、ヴェネツィアやニュルンベルクほどの重要性はもたず第 2 ランクの商都ではあったが、クラクフ商人はしばしば東スロヴァキアやモルダヴィア、そしてプロイセンや北ドイツを訪問しており、大規模な内陸交易を展開してスロヴァキアやモルダヴィアのような後発地域とより発展した西欧（低地地方。Carter はとくにブルッヘ（ブリュージュ）が重要だという）や南欧（北イタリア）を結び付ける重要なリンクの一つとなっていたと評価している[38)]。貿易全体の収支の確定は非常に困難だが、Małecki の概括的な推測では、16 世紀と 17 世紀前半はクラクフにプラス、17 世紀後半はマイナスということである[39)]。いずれにせよ、中世においては、国際商業こそがクラクフに商業中心地としての発展と繁栄をもたらしたのであり、この町の政治や文化面での重要性も、それを基礎として築かれたものと考えるべきであろう。

36) Carter F.W.[1994] p.338.
37) Małecki J.M.[1975] s.186.
38) Carter F.W.[1994] p.169.
39) Małecki J.M.[1975] s.187.

参考文献

・Carter F.W.[1994], *Trade and Urban Development in Poland. An Economic Geography of Cracow, from its origins to 1795*, Cambridge U.P.

・Dobrowolski T.[1971], Sztuka Krakowa, wyd.4, Kraków.

・Kutrzeba,S.[1903], Handel Krakowa w wiekach średnich na tle stosunków handlowych Polski, (Rozprawy Akademii Umiejętności widział historiczno-filozoficzny, serya II Tom XIX), Kraków.

・Małecki J.M.[1975], Rola Krakowa w handlu Europy Środkowej w XVI i XVII wieku, “Zeszyty Naukowe Akademii Ekonomicznej w Krakowie” nr70.

・Małecki J.M.[1983], Znaczenie gospodarcze Krakowa w dawnej Polsce (XVI-XVIII wieku) próba syntezy, “Zeszyty Naukowe Akademii Ekonomicznej w Krakowie” nr173.

・Małecki J.M.[2008], Historia Krakowa dla każdego, Kraków.

・Miodunka P.[2016], Handel Krakowa od XVI do XIX wieku, Stan i perspektywy badań nad rynkiem regionalnym miasta, w J. Purchla red., *Kraków-Metropolia*, Kraków.

・藤井和夫 [2012]、「クラクフにおける民族の再生と新興市民層の形成―境界都市のダイナミズムと近代―」、田中きく代他編、『境界域からみる西洋世界―文化的ボーダーランドとマージナリティ―』、ミネルヴァ書房。